

総 説

看護師－患者の専門的援助関係における「やさしさ」の捉えと意識の研究

豊島 幸子¹⁾ 橋本 知子²⁾ 松本 明美³⁾

¹⁾足利大学 看護学部 ²⁾医療創生大学 看護学部 ³⁾国際医療福祉大学 保健医療学部

要旨

【目的】 看護師を対象として、「やさしさ」の捉えと意識について、勤務年数との関連について明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。

【方法】 G県およびT県にある病院に勤務する看護師 150人を対象に、橋本^{1,2)}による看護師の専門的援助関係の「やさしさ」に含めた概念の枠組みを基に調査を実施した。先行研究^{1,2)}の3つの軸（専門性、距離、主体性）に分類し、勤務年数との関連について検討した。

【結果】 勤務年数と距離、主体性、専門性の3軸との関係は、0～5年経験者では、勤務年数と距離あり、受身的、素人的の変数間において有意な関連がみられた。11～15年経験者では、距離適度、主体的、専門的に有意に関連がみられた。「やさしさ」の特性において、主体的で分かりやすい専門的内容のやさしさの発展がみられた。さらに適度な距離を持って対応していることが明らかとなった。

【結論】 看護師の「やさしさ」の捉えと意識から、距離を適度に保ち、主体的にわかりやすい専門的な内容をもった看護師としての姿が求められる。

キーワード：やさしさ、看護師、患者、意識、人間関係

I 緒言

優しさとは支援、救助、保護といった具体的な結果を指すのではない。むしろ、他者を思い、労り、煩うというプロセスこそが「優しさ」の重要な基幹をなしている³⁾。優しさは信頼関係づくりの基盤になると考える。

看護師が患者の援助の要請にすばやく応じ、必要なことをうまくやり遂げるばかりでなく、それをやさしく、いたわるようにそして安心させるようなやり方でした場合、その看護師は信頼関係のための土台を築くことになる。信頼関係は、時と共に育っていくものである⁴⁾。

英和辞典⁵⁾によると「やさしさ」はTenderness (優しさ, 親切心, 愛情), Gentleness (親切, 優しさ, 温和), Kindness (親切, 優しさ, 思いやり), Graciousness (丁寧さ, 礼儀正しい, 親切な), Considerate (思いやりのある, 優しい), Compassionate (人に対して哀れみ) 等訳されている。「やさしさ」は相手があつての「やさしさ」であり、相手に感情が伝わり良い関係を保つ上で相手との関係に「やさしさ」が関係しており、奥深さのあることを指していると考えられる。加藤⁶⁾は「人間の成長に必要なのは『自分を受け入れてくれる「優しい人」との関係をつくることだ』と述べているように、人間関係が人間の成熟を促し、「情緒的な成熟」に「やさしさ」が必要になってくる。「情緒的な成熟」はパーソナリティの成熟でもあり、成熟が人間関係において自分をいかに成長させ、自己を確立していくかにある。看護師と患者の専門的援助関係は、契約に基づいて相互作用を持つ事に合意した場合に生じる専門的職業的関係で法的責任をもっていると言えよう。看護師と患者の専門的援助関係における「やさしさ」は、専門として責任があるために素人との関係にある「やさしさ」とは違ってくると考える。田坂⁷⁾は『人間を磨くことについて、古典の視点から「理想的人間像」ではなく、いかにして人間として成長していくかという「具体的修業法」を学ぶ大切さを示している。また、人間、「謙虚さ」の修業を続けていると、自然に「本当の自信」が身に付いてくる。「人間を磨く」とは、その意味を感じ取る力を磨くことに他ならない』と述べてい

る。患者に対して、丁寧に優しくゆつくりと話しかけるのは看護の基本であり、患者の心に寄り添う看護が求められている。

「やさしさ」概念は同意語として「思いやり」が必ず存在している。日本においては同じ「意」としてあることは、「やさしさ」を育んできた日本の文化風土の原思想にある仏教や儒教においてどのように取り扱われているかを探る必要がある。まず、佛教辞典によれば、「悲」は、他人の悲しみに同情すること、哀れむこと、人生の苦痛にうめき、嘆いたことのある者のみが、苦しみ悩んでいる者を真実に理解でき、その苦しみに同感し、その苦しみを癒すことができる。その「同苦の思いやり」を悲と呼び、慈悲として取り上げて書かれている⁸⁾。

専門職的な態度として、BEREMOSK⁹⁾は看護師に固有なものに「思いやり、温かさ、受容、客観性、共感」があると述べており、特に、思いやりのある態度は「親切、やさしく、穏やかで、人間的な思慮深い振るまいである」と述べている。看護において社会の人々が看護師に期待している看護師像として「やさしさ」をあげ、患者が看護師に求めている「やさしさ」がある^{10,11)}。このように、「やさしさ」を看護師に求めているとしたならば、看護師として「やさしさ」を明らかにする必要があると考えた。

看護に求められているのは、高度医療についていくことのできる技量であり、看護する人の人間性そのものである。人間性には、人間関係における他者への思いやりや気づかいとしての態度がある。日本には、時を経ても人間関係のとり方に日本文化として定着している「やさしさ」の概念がある。看護における専門的援助関係の場面においてもそれが求められている。20年前の「やさしさ」の先行研究では、看護師の「やさしさ」は専門的援助関係に発展していくプロセスであることが明らかになっている。そこで、時を経て看護師に求められる「やさしさ」はどのように捉えられているのかを把握し養成教育に活かしたいと考えた。本大学では建学の精神「和を以て貴しと為す(以和為貴)」を根底に置き、この「和」の精神を基に、崇高な人格と人間力豊かな人材を育成

している。仏教の精神、聖徳太子の考え方、人間の生き方、しつけなどを、教育の場で各段階に応じ、自然に身につけさせるための教育のありようを検討し教育に取り組んでいる¹²⁾。看護師養成教育において重要となる人間力の育成は養成教育の基盤である。

「ICN看護師の倫理綱領」¹³⁾は、看護師が行動を展開する際の指針であり、自己の実践を振り返る際の基盤を提供するものである。この倫理綱領の中に、看護師は、尊敬の念をもって人々に応え、思いやりや信頼性、高潔さを示し、専門職としての価値を自ら体現することが示されており、常に温かな人間的配慮をもって対応することが示されている。まさに、対象となる人々との間に人間的信頼関係を築き、その信頼関係に基づいて看護が提供されるべき重要な内容である。そして、時に、忍耐をもって見守ることが求められる。高度な知識や技術による看護行為は、信頼関係のもとで初めて効果的な看護援助となりうる。患者は看護師の笑顔、手のぬくもり、そして優しい声かけにどんなに救われることだろう。近年、人工知能(AI)などの技術が進歩する中、看護においてはAIには果たせない「生きる人」としての関わりが不可欠である。こうした背景から看護者は、対象となる人々との間に築かれた関係によって生まれる専門的援助関係能力が求められる。人間教育において、やさしさや思いやりの必要性に関する研究は多くされている^{14)~19)}。先行研究では、外来患者、入院患者を対象に患者満足度調査を実施した結果、看護師の身だしなみ、言葉遣い・態度、やさしさが1位から3位を占めていた²⁰⁾。患者は「よい看護師」に「やさしさ」、「コミュニケーション能力」、「笑顔」などを求めており、それは日本語の「良い」という意味に近かったと報告している²¹⁾。しかし、看護師自身の「やさしさ」の捉え方や意識に関する文献は少なかった。「やさしさ」については、生徒と教師間に存在する心理的距離をより望ましい方向に改善するための研究において、中高校生が教師に望む行動・態度の因子として4因子を抽出しており、その中に「優しい態度の因子」をあげている¹⁹⁾。A.H.Maslowは、自己実現理論²²⁾

である5つの階層の成長過程において、第三段階に情緒的な人間関係が築かれ、第四段階で信頼感・自律性を得られるとしている。この理論からも成長過程での人と人との関係性は心を磨く基盤となると考える。成長過程で関係性を通して培われていく真の「やさしさ」は一人一人がもつ心が土台である。これらのことを踏まえ、看護師の「やさしさ」は、患者が看護師に求める重要な資質であり、「やさしさ」の発展プロセスを明らかにすることは、看護教育において重要である。そこで、橋本^{1,2)}による看護師の専門的援助関係の「やさしさ」に含めた概念の枠組みを基に調査を行い、専門性、距離、主体性の共起パターンの分析と勤務年数との関連について解析することを目的とする。

II 研究方法

1. 研究対象

対象はG県A国立大学病院看護師50人、B病院看護師50人、T県C国立病院看護師50人とした。

2. 研究方法

看護師に「やさしさ」に関する援助場面の過去の体験を想起してもらい、質問紙に自由回答方式によって記述されたものを基に調査し、先行研究の枠組みに基づいて分類する演繹的研究である。先行研究(図1)の3つの軸(専門性、距離、主体性)に分類し、関係性について検討した。さらに勤務年数との関係をみるために量的な統計解析を行った。概念群と年数の比較は対応のないWilcoxon検定を用いた。

3. 回答用紙の構成と内容

質問紙の設問の内容は、以下のとおりである。「やさしさ」について伺います。

①「やさしさ」が存在した状況

患者との関わりの中で「やさしさ」について、「やさしさ」が存在したと思われる場面、あるいは「やさしさ」を強く印象づけられたり認識させられたりした場面を取り上げ、その状況を、できるだけ詳しく書いてください。

②その状況から学んだこと

「やさしさ」という視点でとらえたその場面から、あなたが学んだり、教えられたり、感じたり、心に残ったりしたことについて、あるいは、その場面は、あなたにとって、どのような意味で印象的だったり認識させられたのかについて、できるだけ詳しく書いてください。

③本人が考えている「やさしさ」

一般の人との交わりにおける「やさしさ」とはどのようなものか、専門的援助関係における看護師の「やさしさ」とはどのようなものか、あなたの考えをできるだけ具体的に書いてください。

④「やさしさ」を発揮できる状況

患者との関わりの中で、あなたはどの様な時に専門的援助関係における看護師の「やさしさ」をもって接することができ、どのような時にできないのか、できるだけ詳しく書いて

てください。

質問紙のサイズはA4版とし、一枚の用紙に設問を設け、調査内容とその関連について文書で説明した。

4. 本調査の実施期間

2014年6月中旬～12月下旬に調査を行った。

5. 分析の方法

対象者が自由回答方式の質問紙を用いて、看護師の「やさしさ」に関する体験を想起し記述した内容を以下の方法により分析した。

①記述内容の分析

記述の分析は、質的・量的研究の経験者で行い、繰り返し分析を重ねた。先行研究^{1,2)}(図1)の3つの軸(専門性、距離、主体性)に分類し、関係性について検討した。

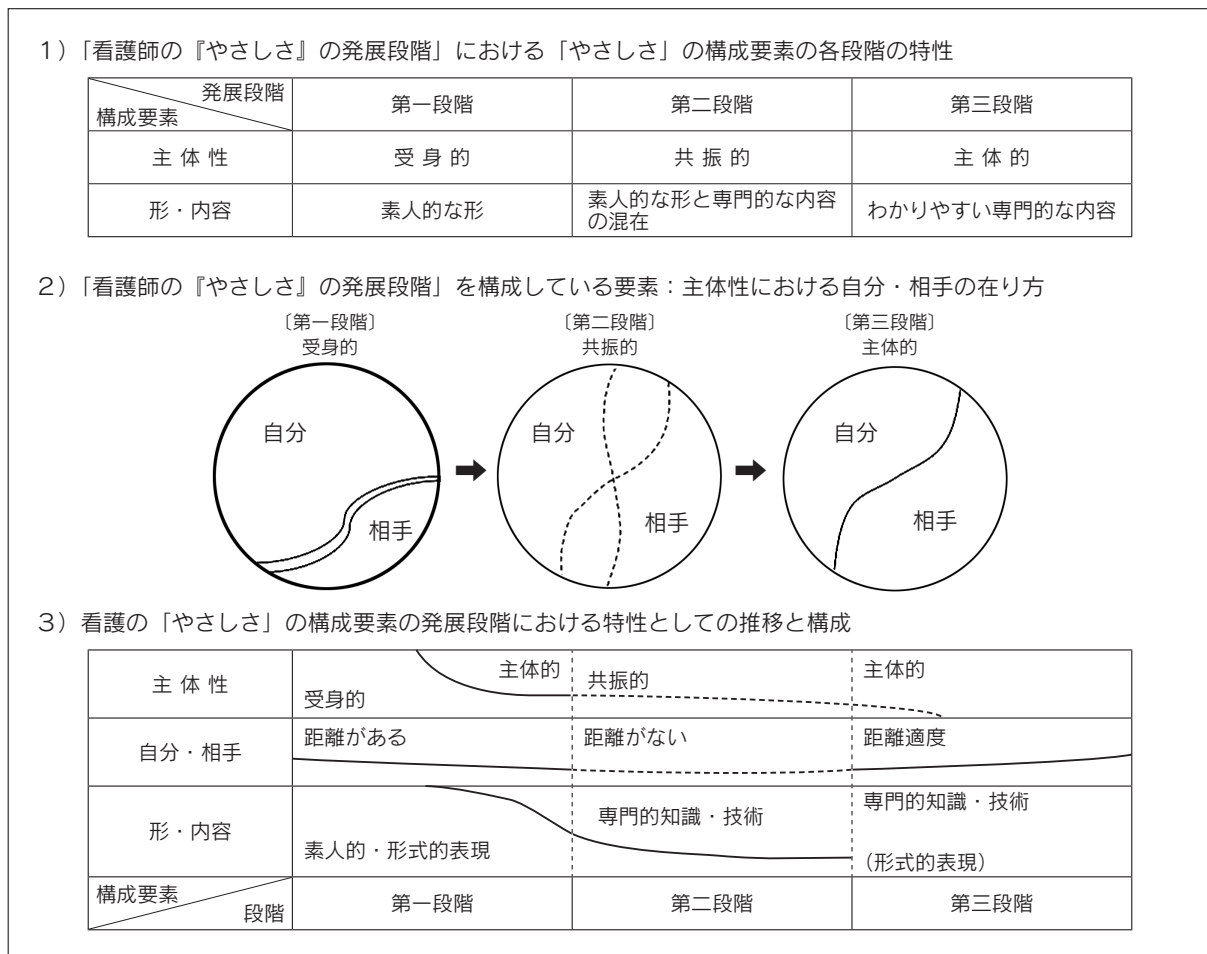


図1 看護師の『やさしさ』の概念枠組み^{1,2)}

②3つの軸の分類

専門性，距離，主体性の分類を行った。専門性については〈素人的〉〈素人的・専門的〉〈専門的〉，距離については〈距離あり〉〈距離なし〉〈距離適度〉，主体性については〈主体的〉〈共振的〉〈受身的〉に分類した。

③分類した内容の共起パターンの分析

専門性，距離，主体性の共起パターンの分析を行った。

④勤務年数との関連

勤務年数（初任・中堅・熟練）との関連について解析した。

統計解析は，Spearmanの順位相関係数，概念群と年数の比較は対応のないWilcoxon検定を用いJMP Ver 8.02（SAS institute Inc., Cary, NC, USA）を使用した。

6. 倫理的配慮

本研究は，A大学倫理審査委員会の承認を得て，実施した。

（2014年3月13日承認：承認番号29）

研究参加の説明（自由意志によるものであること。対象者への不利益がないこと。匿名性，プライバシーの保護等）を行い，研究への協力・依頼文を全員に配付し研究への参加・協力の「同意書」を取得した。

Ⅲ 用語の定義

本研究における「やさしさ」の操作的定義について

「やさしさ」の先行研究^{1,2)}における基本概念

の看護師が専門的援助関係の「やさしさ」に含めていたのは「相手の立場になって」「思いやり」「共感」「専門的知識」「信頼関係」「厳しさ」「その他」を基本概念としていた。また，専門的援助関係の「やさしさ」には経験に裏付けされた構成要素として発展段階があり主体性における「自分・相手のあり方」に特徴があるとする。

第一段階は「受身的で素人的な形」，第二段階は「共振的で素人的な形と専門的な内容の混在」，第三段階は「主体的でわかりやすい専門的な内容」の枠組みで「やさしさ」とする²⁾。

Ⅳ 結果

(1) 「やさしさ」の発展段階の構成要素を基にした分類の結果

①研究対象者の概要（表1）

配布数150部（3病院看護師各50人），回収数81部（回収率54.0%）（有効回答数81部）。勤務年数（人数）は，0～5年（33人），6～10年（10人），11～15年（13人），16～20年（7人），21～25年（11人），26～30年（4人），31～35年（1人），36～40年（2人）であった。

②記述内容の分析結果（表2）

先行研究の3つの軸（専門性，距離，主体性）に分類した結果，
 専門性（素人的・素人専門的・専門的）
 距離（距離あり・距離なし・距離適度）
 主体性（主体的・共振的・受身的）
 専門性の中の《専門的》記述件数と距離適度件数，主体の件数について3つの軸の

表1 属性

勤務年数	n(%)
0～5	33(40.7)
6～10	10(12.4)
11～15	13(16.1)
16～20	7(8.6)
21～25	11(13.6)
26～30	4(4.9)
31～35	1(1.2)
36～40	2(2.5)
計	81(100)

表2 素人的・素人専門的・専門的と距離・主体・共振・受身の関係

		距離の程度			n(%)	主体・共振・受身			n(%)
		距離あり	距離なし	距離適度		主体的	共振的	受身的	
質問1	素人的	17	1	1	19(100)	1	2	16	19(100)
	素人専門的	4	2	2	8(100)	2	3	3	8(100)
	専門的	2	16	31	49(100)	48	0	1	49(100)
質問2	素人的	14	1	4	19(100)	0	2	17	19(100)
	素人専門的	3	2	7	12(100)	10	1	1	12(100)
質問3	素人的	2	11	24	37(100)	37	0	0	37(100)
	素人的	15	0	1	16(100)	1	0	15	16(100)
	素人専門的	1	3	6	10(100)	5	2	3	10(100)
質問4	専門的	2	8	41	51(100)	50	0	1	51(100)
	素人的	25	2	0	27(100)	0	11	16	27(100)
	素人専門的	9	0	1	10(100)	2	4	4	10(100)
	専門的	5	6	15	26(100)	20	5	1	26(100)

それぞれの件数ごとの割合は表2の結果であった。

【質問1】《専門的》距離適度31件(65.3%)
 主体的48件(97.9%) 【質問2】《専門的》
 距離適度24件(64.9%) 主体的37件(100%)
 【質問3】《専門的》距離適度41件(80.4%)
 主体的50件(98.0%) 【質問4】《専門的》
 距離適度15件(57.7%) 主体的20件(76.9%)
 であった。

③3つの軸の分類結果(表3)(表4)

【質問1】やさしさが存在した状況【質問2】
 その状況から学んだこと【質問3】本人が考

えているやさしさ【質問4】やさしさを発揮
 できる状況の記述より、距離適度・主体的・
 専門的では、0～5年経験者【質問1】距
 離適度20件, 主体的22件, 専門的21件【質
 問2】距離適度2件, 主体的18件, 専門的
 14件【質問3】距離適度1件, 主体的19件,
 専門的18件【質問4】距離適度0件, 主体7
 件, 専門的9件であった。距離あり・受身的・
 素人的では、【質問1】距離あり10件, 受身
 的10件, 素人的9件【質問2】距離あり10件,
 受身的10件, 素人的10件【質問3】距離あ
 り12件, 受身的12件, 素人的9件【質問4】

表3 勤務年数と距離・主体的・専門的の結果

〈質問1〉「やさしさ」が存在した状況

勤務年数	距離適度	主体的	専門的	n (%)
0～5	20	22	21	33 (40.7)
6～10	5	6	8	10 (12.4)
11～15	3	9	3	13 (16.1)
16～20	1	3	6	7 (8.6)
21～25	4	6	2	11 (13.6)
26～30	0	2	1	4 (4.9)
31～35	1	1	1	1 (1.2)
36～40	1	2	2	2 (2.5)
計				81 (100)

〈質問3〉本人が考えている「やさしさ」

勤務年数	距離適度	主体的	専門的	n (%)
0～5	1	19	18	33 (40.7)
6～10	1	7	7	10 (12.4)
11～15	2	12	9	13 (16.1)
16～20	1	6	6	7 (8.6)
21～25	3	6	5	11 (13.6)
26～30	3	4	4	4 (4.9)
31～35	0	0	0	1 (1.2)
36～40	0	2	2	2 (2.5)
計				81 (100)

〈質問2〉その状況から学んだこと

勤務年数	距離適度	主体的	専門的	n (%)
0～5	2	18	14	33 (40.7)
6～10	1	6	6	10 (12.4)
11～15	3	9	5	13 (16.1)
16～20	3	5	3	7 (8.6)
21～25	2	6	4	11 (13.6)
26～30	2	3	2	4 (4.9)
31～35	0	1	1	1 (1.2)
36～40	1	2	2	2 (2.5)
計				81 (100)

〈質問4〉「やさしさ」を発揮できる状況

勤務年数	距離適度	主体的	専門的	n (%)
0～5	0	7	9	33 (40.7)
6～10	2	4	5	10 (12.4)
11～15	1	2	2	13 (16.1)
16～20	1	3	3	7 (8.6)
21～25	2	4	4	11 (13.6)
26～30	2	2	2	4 (4.9)
31～35	0	1	0	1 (1.2)
36～40	0	2	1	2 (2.5)
計				81 (100)

表4 勤務年数と距離・受身的・素人的の結果

〈質問1〉「やさしさ」が存在した状況

勤務年数	距離あり	受身的	素人的	n (%)
0～5	10	10	9	33 (40.7)
6～10	2	1	3	10 (12.4)
11～15	4	3	3	13 (16.1)
16～20	3	2	1	7 (8.6)
21～25	3	3	3	11 (13.6)
26～30	1	1	0	4 (4.9)
31～35	0	0	0	1 (1.2)
36～40	0	0	0	2 (2.5)
計				81 (100)

〈質問3〉本人が考えている「やさしさ」

勤務年数	距離あり	受身的	素人的	n (%)
0～5	12	12	9	33 (40.7)
6～10	2	2	2	10 (12.4)
11～15	1	1	1	13 (16.1)
16～20	1	1	1	7 (8.6)
21～25	2	3	3	11 (13.6)
26～30	0	0	0	4 (4.9)
31～35	0	0	0	1 (1.2)
36～40	0	0	0	2 (2.5)
計				81 (100)

〈質問2〉その状況から学んだこと

勤務年数	距離あり	受身的	素人的	n (%)
0～5	10	10	10	33 (40.7)
6～10	2	1	2	10 (12.4)
11～15	4	4	4	13 (16.1)
16～20	0	2	2	7 (8.6)
21～25	2	1	1	11 (13.6)
26～30	2	0	0	4 (4.9)
31～35	0	0	0	1 (1.2)
36～40	0	0	0	2 (2.5)
計				81 (100)

〈質問4〉「やさしさ」を発揮できる状況

勤務年数	距離あり	受身的	素人的	n (%)
0～5	17	13	11	33 (40.7)
6～10	4	2	4	10 (12.4)
11～15	6	3	3	13 (16.1)
16～20	4	0	4	7 (8.6)
21～25	5	2	4	11 (13.6)
26～30	2	0	1	4 (4.9)
31～35	0	0	0	1 (1.2)
36～40	1	0	0	2 (2.5)
計				81 (100)

距離あり17件，受身的13件，素人的11件であった。

④分類した内容の共起パターンの結果（表5～表24）

勤務年数と距離，主体性，専門性の3軸との関係は，0～5年経験者では，【質問1】

距離適度，主体的，専門的において有意に関連がみられた（ $p=0.745$ ）。【質問2】主体的，専門的において有意に関連がみられた（ $p=0.783$ ）。【質問3】主体的，専門的において有意に関連がみられた（ $p=0.817$ ）。【質問4】主体的，専門的において有意に関連がみられ

〈質問1〉

表5 勤務年数5年以下における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.745***	1.000	
専門的	0.679***	0.801***	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問1〉

表6 勤務年数6年～10年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.408	1.000	
専門的	0.408	1.000***	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問1〉

表7 勤務年数11年～15年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.365	1.000	
専門的	0.433	0.843*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問1〉

表8 勤務年数16年～20年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.471	1.000	
専門的	0.471	1.000***	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問1〉

表9 勤務年数21年～25年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.690*	1.000	
専門的	0.690*	1.000***	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問2〉

表10 勤務年数5年以下における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	-0.180	1.000	
専門的	0.007	0.783***	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問2〉

表11 勤務年数6年～10年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	-	1.000	
専門的	-	-	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問2〉

表12 勤務年数11年～15年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.74	1.000	
専門的	0.74	1.000*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問2〉

表13 勤務年数16年～20年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.668	1.000	
専門的	0.152	0.547	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問2〉

表14 勤務年数21年～25年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.690	1.000	
専門的	0.690	1.000*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問3〉

表15 勤務年数5年以下における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.151	1.000	
専門的	-0.193	0.817*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問3〉

表16 勤務年数6年～10年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.218	1.000	
専門的	0.218	1.000*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

〈質問3〉

表17 勤務年数11年～15年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.123	1.000	
専門的	0.284	0.433	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

〈質問3〉

表18 勤務年数16年～20年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.166	1.000	
専門的	0.166	1.000*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

〈質問3〉

表19 勤務年数21年～25年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	-0.260	1.000	
専門的	-0.149	0.833*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

〈質問4〉

表20 勤務年数5年以下における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.000	1.000	
専門的	0.000	0.843*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

〈質問4〉

表21 勤務年数6年～10年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.048	1.000	
専門的	-0.059	0.816*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

〈質問4〉

表22 勤務年数11年～15年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.677*	1.000	
専門的	0.677*	1.000*	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

〈質問4〉

表23 勤務年数16年～20年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.471	1.000	
専門的	0.471	1.000***	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

〈質問4〉

表24 勤務年数21年～25年における変数間の相関係数¹⁾

	距離適度	主体的	専門的
距離適度	1.000		
主体的	0.670*	1.000	
専門的	0.623*	0.418	1.000

1) spearmanの順位相関係数 n.s. (not significant), *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

た(p=0.843)。

⑤勤務年数との関連(図2)(図3)

勤務年数との関連性を検討した結果、0～5年と有意差があったのは、【受身的】では、【質問3】0～5年と11～15年(p=0.043)、【質問4】0～5年と16～20年(p=0.0224)【共振的】では、【質問1】0～5年と6～10年(p=0.022) 0～5年と11～15年(p=0.0484) 0～5年と21～25年(p=0.0306)【質問3】0～5年と21～25年(p=0.0008)【質問4】0～5年と16～20年(p=0.0065)【距離適度】では、【質問3】0～5年と26～30年(p=0.0001)【質問4】0～5年と26～30年(p=0.0016)【距離あり】では、【質問3】0～5年と11～15年(p=0.040)【主体的】では、【質問1】0～5年と11～15年(p=0.043)【質問3】0～5年と11～15年(p=0.0206)【質問4】0～5年と36～40年(p=0.0145)【素人・専門的】では、【質問4】0～5年と31～35年(p=0.0069)であった。

V 考察

1. 20年前の先行研究における看護師－患者の専門的援助関係の「やさしさ」に含めた概念枠組みを基にした専門性、距離、主体性の共起パターンの分析

橋本^{1,2)}の看護師の「やさしさ」の発展段階の構成要素の第三段階において明らかにしている特性である主体的でわかりやすい専門的な内容に記述の多さが明らかとなった。20年前の先行研究における看護師－患者の専門的援助関係の「やさしさ」に含めた概念枠組みに至った内容分析の結果と本研究における数的な記述件数を解析した結果にやさしさの発展段階がある共通性を確認することができた。時を経ても3軸(専門性、距離、主体性)の角度から看護師としての「やさしさ」が培われると考えられた。看護師の「やさしさ」の捉えと意識から、距離を適度に保ち、主体的にわかりやすい専門的な内容をもった看護師としての姿が求められる。人間関係のとり方に日本

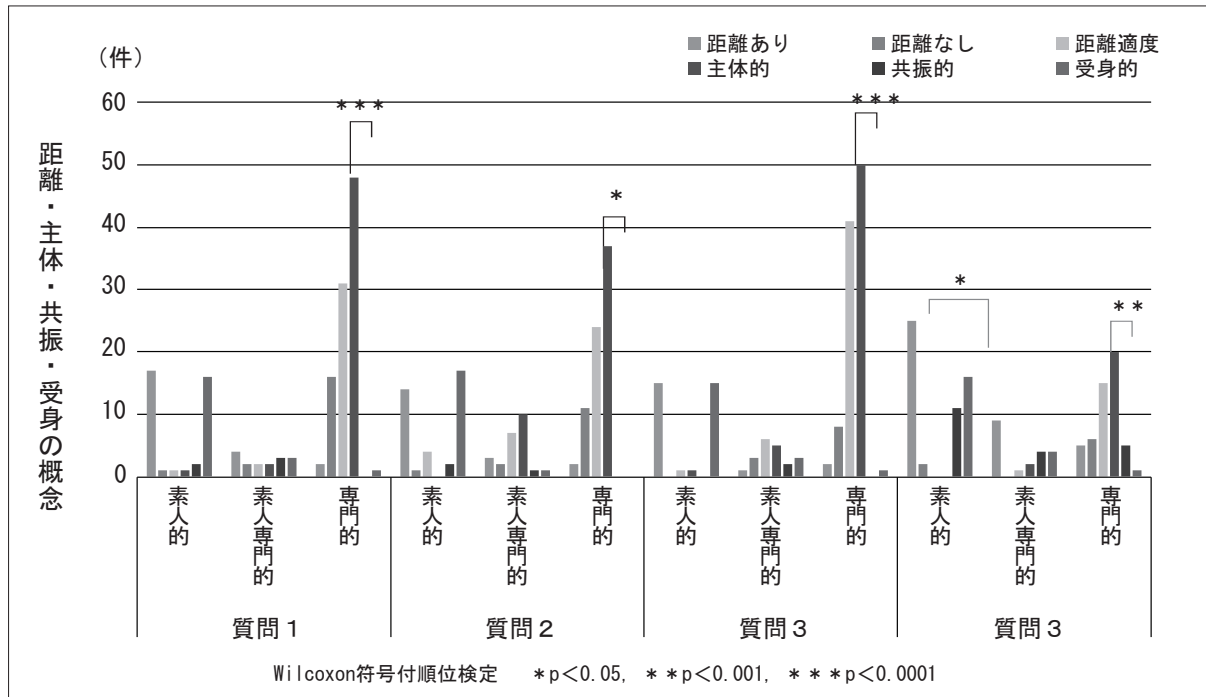


図2 素人専門的と距離・主体・共振・受身との関係

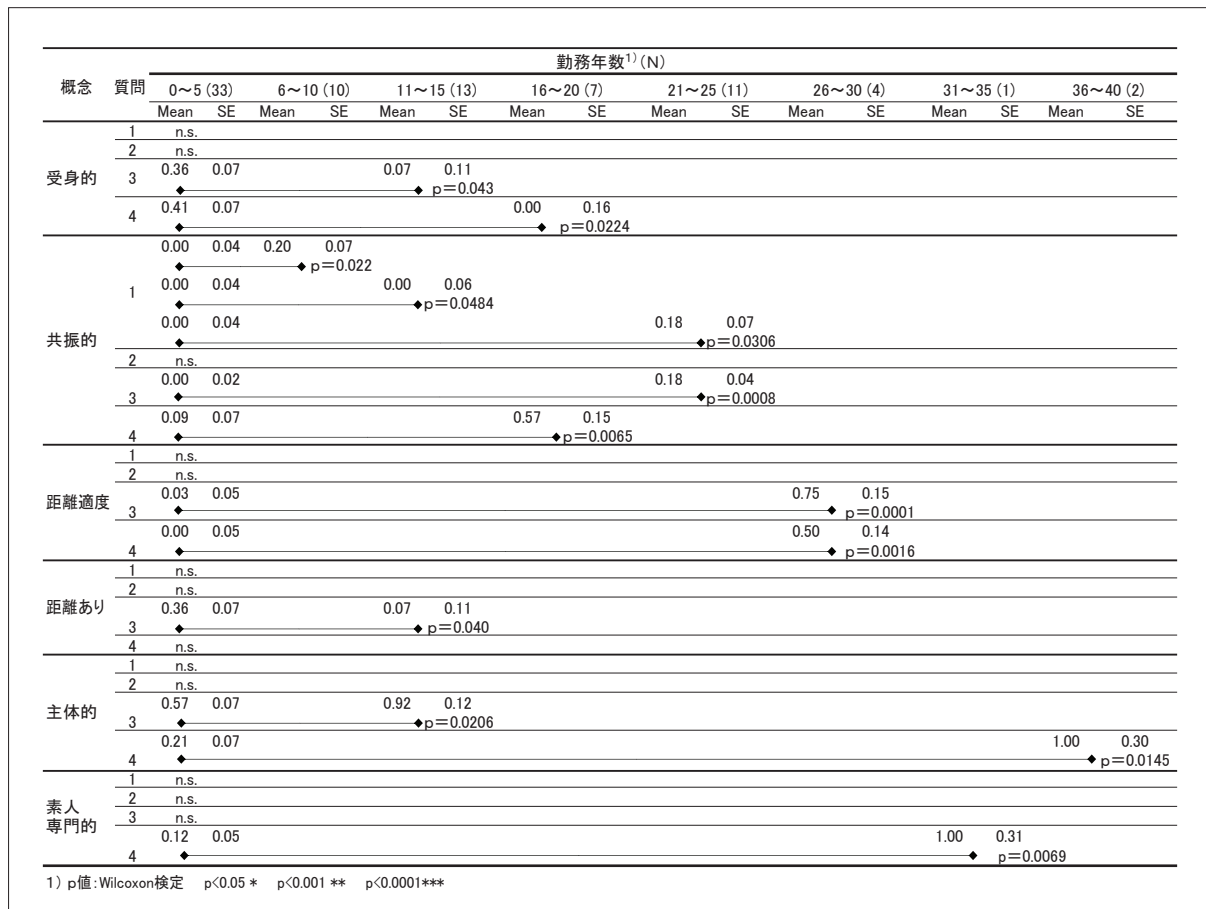


図3 看護師－患者の専門的援助関係における「やさしさ」の概念群と勤務年数との関係

文化として定着している「やさしさ」の概念があるが、看護における専門的援助関係の場面においてもそれが求められていることが記述件数においても確認できた。20年前の「やさしさ」の先行研究である看護師の「やさしさ」は、専門的援助関係に発展していくプロセスの第一段階は「受身的で素人的なやさしさ」、第二段階は「共振的で素人的な形と専門的内容が混雑しているやさしさ」、第三段階は「主体的でわかりやすい専門的内容のやさしさ」で、この三つの発展段階に沿って成長していくプロセスを数量的解析によって確認することができたと考える。経験を通して（自分と相手）共振しながら、3軸の角度から専門的な関係性をもった「やさしさ」の発展段階を経て専門職として自立することが求められる。著者らは、臨床での看護師の経験から「やさしさ」を追求し、自ら問い患者及び対象者へ対応できる専門職でありたいと考える。養成教育の段階から看護師の「やさしさ」について学びを共有することが望まれる。

2. 看護師の「やさしさ」の発展段階と勤務年数

本研究では、「性別」、「年齢」、「勤務経験者の人数」の角度から「やさしさ」の捉えと意識について分析を目的としておらず、先行研究^{1,2)}の「やさしさ」の発展段階に照らして分析を行った。

勤務年数と距離、主体性、専門性の3軸との関係は、0～5年経験者では、やさしさが存在した状況について、距離適度、主体的、専門的において有意に関連がみられた。また、距離あり、受身的、素人的においても有意に関連がみられたことから、1年目から5年経験者において成長の著しい段階であると考えられた。質問2のその状況から学んだことについて、専門的と主体的の変数間に有意に関連がみられた。1年目から5年経験者までの期間は、距離、主体性、専門性の3軸の角度から「やさしさ」が培われていくのではないかと考えられた。本人が考えているやさしさについては、専門的と主体的に有意に関連がみられたが、距離あり、受身的、素人的の変数間で有意に関連がみられており、共に学び合え

る職場における初任者研修や経験者研修の強化が求められると考えられた。

6～10年経験者では、主体的と専門的の変数間に有意な関連がみられ、「やさしさ」を発揮できる状況では距離あり、受身的、素人的の変数には関連がみられず、経験を重ねることで発揮度が高まると考えられた。初任者では関連がみられており、発展段階に沿って成長していくと考えられた。

11～15年、16～20年、21～25年経験者では、「やさしさ」を発揮できる状況において距離適度、主体的、専門的に有意に関連がみられた。26～40年経験者では、距離あり、受身的、素人的の記述はみられなかった。

看護師の「やさしさ」の発展段階が素人的から専門的になっていく過程を勤務年数という視点から捉えると、知識を経験に応用していく過程として「嬉しかった」「教えてくれた」等、素人的な記述から専門的な表現として「患者の状態を的確にアセスメントできた時」など具体的な行為が記述されている。経験を積んだ看護師が主体的に取り組むためには、経験値に裏づけられた対応が図られているのではないかと推察された。初任者は、「自分に余裕がないとやさしさを持ってない」などの記述からも共振的なその人との交わりに関する考えは挙げられておらず、その時の知識、技術で対応することで精一杯というところであり、経験を重ねることによって自他を思い遣る気持ちをもてる共振的な関係性が形成されると考えられた。初任者の積極的に人間関係のあり方を学ぶ姿勢が重要であることが示唆された。しかし、必ずしも勤務年数を重ねるだけではなく、看護支援する過程において、専門家としての人間関係を省察する力を育むことでエキスパートになっていくものと思われる。第一段階は「受身的で素人的なやさしさ」、第二段階は「共振的で素人的な形と専門的内容が混雑しているやさしさ」、第三段階は「主体的でわかりやすい専門的内容のやさしさ」この三つの発展段階も、患者は自分のニーズを満足するために積極的に自己投入できる看護師と向き合えることであり、看護師は患者と専門的関係において、主体的に「やさしさ」

を提供するといった関係が成り立っていく過程であるといえる。そこには社会的責任のある専門的に位置づけられた看護師の「やさしさ」が、看護師の「個の確立」²³⁾としての自立や自律が問われることとなるのではないかと考えられた。

本研究の背景には、時を経ても「やさしさ」の概念が日本文化として残り「やさしさ」の概念が定着していると考えられる。やさしさ(思いやりを含む)の素地を育成し、自ら学ぶ過程を通して、やさしさ・思いやりが醸成され、看護行為に活かされると考える。

これまでの研究でも、豊島ら²⁴⁾は看護学生の「やさしさ」の捉えと意識の実態を分析した結果、一般的な「やさしさ」と異なる大きな特徴があり、やさしさの中に「専門的知識」「厳しさ」を含めて捉えていることから知識を経験に転用していく過程にあることを明らかにしている²⁴⁾。看護が患者の自立に関わる責任ある仕事として意識しているからであると考えられ、専門的知識、厳しさを含めた対人関係能力の育成が求められるだろう。

基礎教育力について、最も効果的な媒体は、学生および卒業生の姿であり教員の姿でもある。人間教育が必須であり、看護教育の独自性を看護の特性にある人間相手のコミュニケーション能力開発に着眼した教育が求められてくる。看護師に要求されている知識・技術・慈愛の心の三つの要素を駆使し、看護という実践の学問の中で患者に快く満足のいく援助ができる看護師を目指し、養成と現場を繋ぎ合うことこそが看護の本当の意味で質の向上が期待される。専門的な「やさしさ」を培うためには、日々の自らの姿勢や自立、自律、そして看護専門職として、一人の人間として、想像力を磨き、相手が何を考え、何を感じているのかを知ろうと努力することが求められる。また、専門家としての成長・成熟過程にあることを認識し、経験を蓄積することが肝要であると考えられた。

VI 結論

本研究は、橋本^{1,2)}による看護師の専門的援助関係の「やさしさ」に含めた概念の枠組みを基

に調査を行い、数的な解析をした結果、第三段階の「やさしさ」の特性において、主体的で分かりやすい専門的内容のやさしさの発展がみられた。さらに適度な距離を持って対応していることが明らかとなった。看護師の「やさしさ」の捉えと意識から、距離を適度に保ち、主体的にわかりやすい専門的な内容をもった看護師としての姿が求められる。人工知能(AI)などの技術が進歩する中、看護においては専門的援助関係能力が求められる。

VII 本研究の限界と課題

対象者に「やさしさ」に関する過去の経験を想起してもらうというデータ収集の方法をとったが、「やさしさ」そのものが曖昧な概念であり、意識的に想起する事は記述の限界であり、研究の限界でもある。しかし、20年前の「やさしさ」の先行研究^{1,2)}が専門的援助関係に発展していくプロセスであることの研究結果と同様であった。このことから、この研究の背景には、時を経ても「やさしさ」の概念が日本文化としてあり、「やさしさ」の概念が定着していることや「やさしさ」の考えは、20年前と変わらない結果であったと考える。

「やさしさは、私たちが周囲の人に、そして、自分自身に差し出すことができる、最高の贈り物なのである。」²⁵⁾と述べられているように、看護専門職として、もとより一人の人間として、想像力を磨き、相手が何を考え、何を感じているのかを知ろうと努力することが今日においても課題である。

〈引用文献〉

- 1) 橋本知子. 看護婦－患者の専門的援助関係 看護婦の「やさしさ」－その1－. 足利短期大学研究紀要. 1994; 15: 67-68.
- 2) 橋本知子. 看護婦－患者の専門的援助関係 看護婦の「やさしさ」－その2－. 足利短期大学研究紀要. 1994; 15: 79-84.
- 3) 池谷裕二, 糸井重里, 海馬. 新潮文庫; 2016. 311.
- 4) コミュニケーション－効果的な看護を展開する鍵－. 池田明子訳. 日本看護協会出版会; 1991. 133-134

- 5) 井上永幸, 赤野一郎. WISDOM英和辞典. 三省堂;2003. 411-2062.
- 6) 加藤諦三. やさしさの心理. 大和人生文庫; 1987.
- 7) 田坂広志. 人間を磨く. 光文社新書;2016. 19-20,109,221.
- 8) 中村元. 新・佛教辞典 第三版. 誠信書房; 2006. 252.
- 9) LORETTA SUE BEREMOSK, 他. 松野かほる訳. 新版 看護面接の理論. 医学書院; 1983
- 10) 武野祥二. 患者が望むよい看護. 看護. 1948; 1 (1): 94-103.
- 11) 石頭恵子. 理想の看護師像—心のやさしさを通して看護婦像を考える. 共済医報. 1948; 30 (3): 82-84.
- 12) 遠藤玄昌. 社会貢献から教育へ 足利仏教和合会の百二十七年. 足利仏教和合会史編集委員会;2012. 263.
- 13) 「ICN看護師の倫理綱領」. 国際看護協会; 2012.
- 14) 笠松由佳. 患者が認知する「やさしさ」を成立させる看護の構造化(第2報). 日本看護科学学会学術集会講演. 2009; 29 (1): 373.
- 15) 倉林しのぶ. 「よい」という概念の探求 死別を体験した患者家族にとっての「よい看護師」とは. 日本看護倫理学会誌. 2010;2(1): 23-29.
- 16) 松木志和. 思春期摂食障害患者の行動療法導入までのプロセス ペプロウの理論を用いて分析した一事例. 日本精神科看護学会. 2008; 51(2) : 261-265.
- 17) 佐藤圭子, 河尻雅子, 竹内恵美, 他. 接遇に関する患者のアンケート調査. 尾道市立市民病院医学雑誌. 2008;23(2) : 57-60.
- 18) 大森眞澄. 思春期摂食障害患者に対する行動療法的治療における看護師の役割. 日本精神科看護学会誌. 2006; 49 (2) : 31-35.
- 19) 山口正二, 土屋泰生, 藤本尚文. 生徒と教師の心理的距離の改善に望ましいと判断される行動・態度に関する研究. 1996;29(1): 169-179.
- 20) 吉川久美子, 井部俊子, 久保田純子, 他. 聖路加国際病院における患者満足度調査の傾向と展望. 聖路加健康科学誌. 2001; 9 (1) : 6-18.
- 21) 倉林しのぶ. 「よい」という概念の探求 死別を体験した患者家族にとっての「よい看護師」とは. 日本看護倫理学会誌. 2010; 2(1): 23-29.
- 22) A.H.Maslow. 人間性の心理学. 産業能率大学出版;1987. 55-144.
- 23) 中西睦子. やさしさの力学. 看護. 1989; 41 (3) : 31-38.
- 24) 豊島幸子, 橋本知子, 青山三智子, 他. 看護学生における「やさしさ」の捉えと意識. 群馬医療福祉大学紀要. 2014; 3 (1) : 47-59.
- 25) ステファン・アインホルン. 池上明子訳. 「やさしさ」という技術. 飛鳥新社;2015. 220.

〔 受付日 2019年 7月23日 〕
〔 受理日 2019年12月16日 〕

Study of nurses' perceptions and awareness of "Yasashisa" in nurse – patient professional supportive relationships

Yukiko Toshima¹⁾ Tomoko Hashimoto²⁾ Akemi Matsumoto³⁾

¹⁾ Department of Nursing, Ashikaga University

²⁾ Department of Nursing, Iryo Sosei University, Japan

³⁾ Department of Nursing, International University of Health and Welfare

Abstract

[Purpose] A questionnaire survey was administered to nurses with the aim of clarifying the relationship between years of work experience and perceptions and awareness of "compassion" (Jp. yasashisa) .

[Methods] The survey was administered to 150 nurses working in hospitals in G and T Prefectures in Japan based on Hashimoto's conceptual framework,^{1, 2)} which is included in "compassion" in the context of nurses' professional support relationships. Responses were classified on three axes identified in previous research (professionalism, distance, and independence) and then examined in relation to years of work experience.

[Results] In terms of the relationship between years of work experience and the three axes of distance, independence, and professionalism, among individuals with 0-5 years of work experience, significant relationships were observed between years of experience and the variables of positive distance, passivity, and amateurishness. Among individuals with 11-15 years of work experience, significant relationships were observed for moderate distance, independence, and professionalism. In terms of the features of "compassion" in this context, the development of compassion was apparent for professional content that was independent and easy-to-understand. Further, it also became clear that compassion characterized dealings involving a moderate degree of distance.

[Conclusion] Perceptions and awareness of "compassion" among nurses indicate an image of a nurse who keeps a moderate degree of distance and practices professional content that is independent and easy-to-understand.

Key words : yasashisa, nurse, patient, awareness, interpersonal relationships

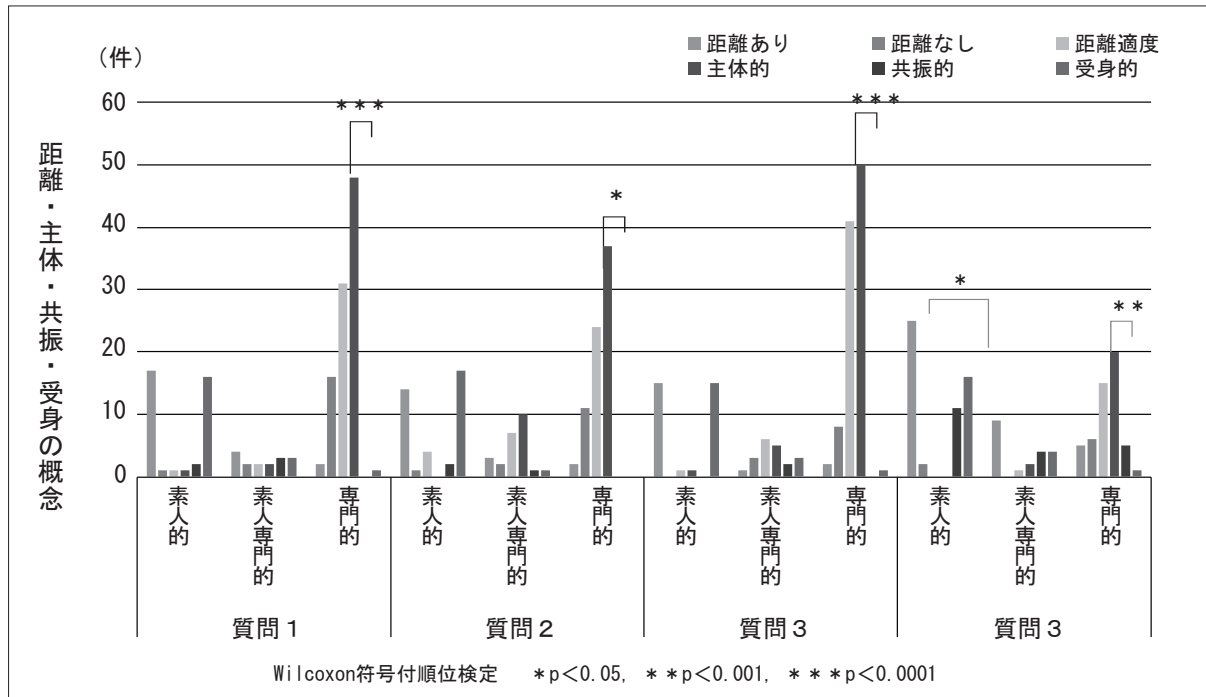


図2 素人専門的と距離・主体・共振・受身との関係

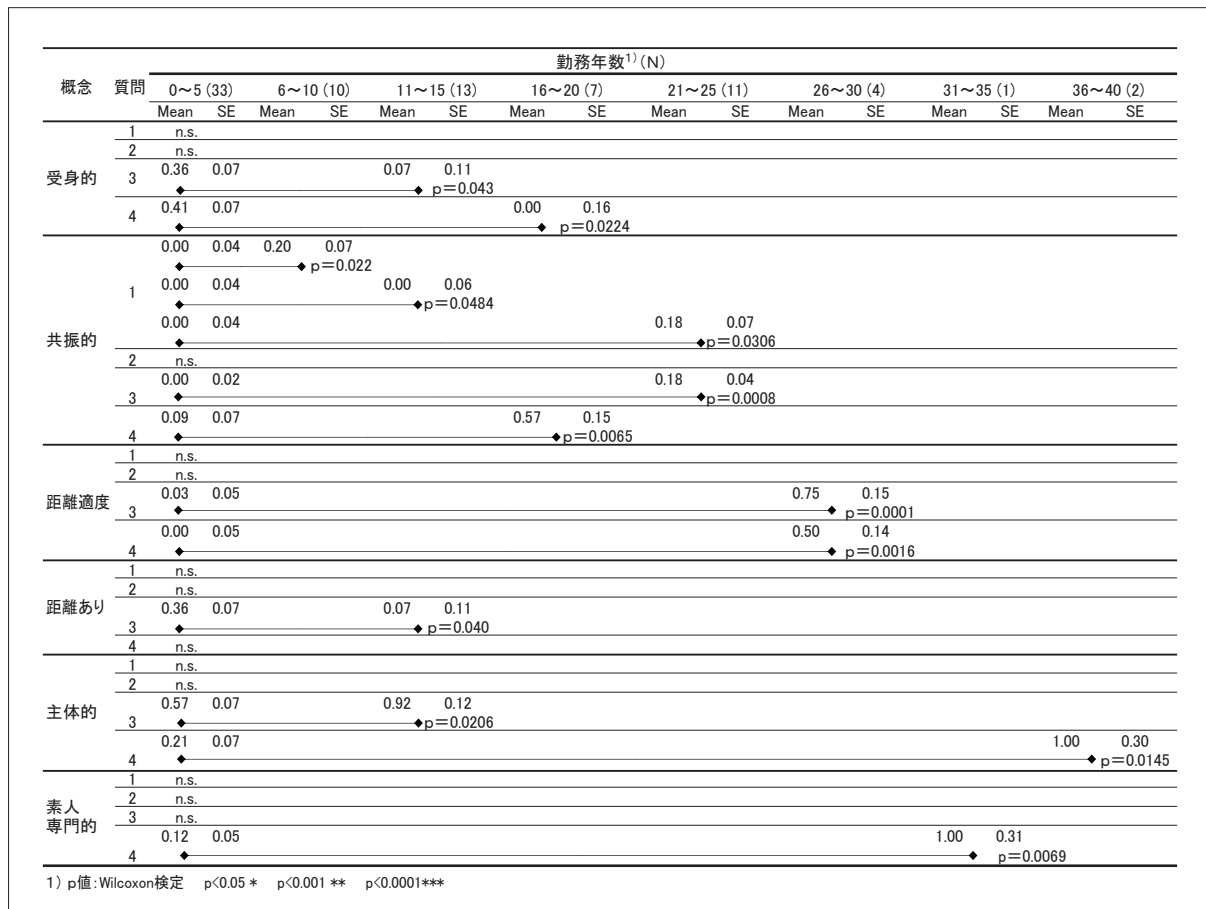


図3 看護師－患者の専門的援助関係における「やさしさ」の概念群と勤務年数との関係

文化として定着している「やさしさ」の概念があるが、看護における専門的援助関係の場面においてもそれが求められていることが記述件数においても確認できた。20年前の「やさしさ」の先行研究である看護師の「やさしさ」は、専門的援助関係に発展していくプロセスの第一段階は「受身的で素人的なやさしさ」、第二段階は「共振的で素人的な形と専門的内容が混雑しているやさしさ」、第三段階は「主体的でわかりやすい専門的内容のやさしさ」で、この三つの発展段階に沿って成長していくプロセスを数量的解析によって確認することができたと考える。経験を通して（自分と相手）共振しながら、3軸の角度から専門的な関係性をもった「やさしさ」の発展段階を経て専門職として自立することが求められる。著者らは、臨床での看護師の経験から「やさしさ」を追求し、自ら問い患者及び対象者へ対応できる専門職でありたいと考える。養成教育の段階から看護師の「やさしさ」について学びを共有することが望まれる。

2. 看護師の「やさしさ」の発展段階と勤務年数

本研究では、「性別」、「年齢」、「勤務経験者の人数」の角度から「やさしさ」の捉えと意識について分析を目的としておらず、先行研究^{1,2)}の「やさしさ」の発展段階に照らして分析を行った。

勤務年数と距離、主体性、専門性の3軸との関係は、0～5年経験者では、やさしさが存在した状況について、距離適度、主体的、専門的において有意に関連がみられた。また、距離あり、受身的、素人的においても有意に関連がみられたことから、1年目から5年経験者において成長の著しい段階であると考えられた。質問2のその状況から学んだことについて、専門的と主体的の変数間に有意に関連がみられた。1年目から5年経験者までの期間は、距離、主体性、専門性の3軸の角度から「やさしさ」が培われていくのではないかと考えられた。本人が考えているやさしさについては、専門的と主体的に有意に関連がみられたが、距離あり、受身的、素人的の変数間で有意に関連がみられており、共に学び合え

る職場における初任者研修や経験者研修の強化が求められると考えられた。

6～10年経験者では、主体的と専門的の変数間に有意に関連がみられ、「やさしさ」を発揮できる状況では距離あり、受身的、素人的の変数には関連がみられず、経験を重ねることで発揮度が高まると考えられた。初任者では関連がみられており、発展段階に沿って成長していくと考えられた。

11～15年、16～20年、21～25年経験者では、「やさしさ」を発揮できる状況において距離適度、主体的、専門的に有意に関連がみられた。26～40年経験者では、距離あり、受身的、素人的の記述はみられなかった。

看護師の「やさしさ」の発展段階が素人的から専門的になっていく過程を勤務年数という視点から捉えると、知識を経験に応用していく過程として「嬉しかった」「教えてくれた」等、素人的な記述から専門的な表現として「患者の状態を的確にアセスメントできた時」など具体的な行為が記述されている。経験を積んだ看護師が主体的に取り組むためには、経験値に裏づけられた対応が図られているのではないかと推察された。初任者は、「自分に余裕がないとやさしさを持ってない」などの記述からも共振的なその人との交わりに関する考えは挙げられておらず、その時の知識、技術で対応することで精一杯というところであり、経験を重ねることによって自他を思い遣る気持ちをもてる共振的な関係性が形成されると考えられた。初任者の積極的に人間関係のあり方を学ぶ姿勢が重要であることが示唆された。しかし、必ずしも勤務年数を重ねるだけではなく、看護支援する過程において、専門家としての人間関係を省察する力を育むことでエキスパートになっていくものと思われる。第一段階は「受身的で素人的なやさしさ」、第二段階は「共振的で素人的な形と専門的内容が混雑しているやさしさ」、第三段階は「主体的でわかりやすい専門的内容のやさしさ」この三つの発展段階も、患者は自分のニーズを満足するために積極的に自己投入できる看護師と向き合えることであり、看護師は患者と専門的関係において、主体的に「やさしさ」

を提供するといった関係が成り立っていく過程であるといえる。そこには社会的責任のある専門的に位置づけられた看護師の「やさしさ」が、看護師の「個の確立」²³⁾としての自立や自律が問われることとなるのではないかと考えられた。

本研究の背景には、時を経ても「やさしさ」の概念が日本文化として残り「やさしさ」の概念が定着していると考えられる。やさしさ(思いやりを含む)の素地を育成し、自ら学ぶ過程を通して、やさしさ・思いやりが醸成され、看護行為に活かされると考える。

これまでの研究でも、豊島ら²⁴⁾は看護学生の「やさしさ」の捉えと意識の実態を分析した結果、一般的な「やさしさ」と異なる大きな特徴があり、やさしさの中に「専門的知識」「厳しさ」を含めて捉えていることから知識を経験に活用していく過程にあることを明らかにしている²⁴⁾。看護が患者の自立に関わる責任ある仕事として意識しているからであると考えられ、専門的知識、厳しさを含めた対人関係能力の育成が求められるだろう。

基礎教育力について、最も効果的な媒体は、学生および卒業生の姿であり教員の姿でもある。人間教育が必須であり、看護教育の独自性を看護の特性にある人間相手のコミュニケーション能力開発に着眼した教育が求められてくる。看護師に要求されている知識・技術・慈愛の心の三つの要素を駆使し、看護という実践の学問の中で患者に快く満足のいく援助ができる看護師を目指し、養成と現場を繋ぎ合うことこそが看護の本当の意味で質の向上が期待される。専門的な「やさしさ」を培うためには、日々の自らの姿勢や自立、自律、そして看護専門職として、一人の人間として、想像力を磨き、相手が何を考え、何を感じているのかを知ろうと努力することが求められる。また、専門家としての成長・成熟過程にあることを認識し、経験を蓄積することが肝要であると考えられた。

VI 結論

本研究は、橋本^{1,2)}による看護師の専門的援助関係の「やさしさ」に含めた概念の枠組みを基

に調査を行い、数的な解析をした結果、第三段階の「やさしさ」の特性において、主体的で分かりやすい専門的内容のやさしさの発展がみられた。さらに適度な距離を持って対応していることが明らかとなった。看護師の「やさしさ」の捉えと意識から、距離を適度に保ち、主体的にわかりやすい専門的な内容をもった看護師としての姿が求められる。人工知能(AI)などの技術が進歩する中、看護においては専門的援助関係能力が求められる。

VII 本研究の限界と課題

対象者に「やさしさ」に関する過去の経験を想起してもらうというデータ収集の方法をとったが、「やさしさ」そのものが曖昧な概念であり、意識的に想起する事は記述の限界であり、研究の限界でもある。しかし、20年前の「やさしさ」の先行研究^{1,2)}が専門的援助関係に発展していくプロセスであることの研究結果と同様であった。このことから、この研究の背景には、時を経ても「やさしさ」の概念が日本文化としてあり、「やさしさ」の概念が定着していることや「やさしさ」の考えは、20年前と変わらない結果であったと考える。

「やさしさは、私たちが周囲の人に、そして、自分自身に差し出すことができる、最高の贈り物なのである。」²⁵⁾と述べられているように、看護専門職として、もとより一人の人間として、想像力を磨き、相手が何を考え、何を感じているのかを知ろうと努力することが今日においても課題である。

〈引用文献〉

- 1) 橋本知子. 看護婦－患者の専門的援助関係 看護婦の「やさしさ」－その1－. 足利短期大学研究紀要. 1994; 15: 67-68.
- 2) 橋本知子. 看護婦－患者の専門的援助関係 看護婦の「やさしさ」－その2－. 足利短期大学研究紀要. 1994; 15: 79-84.
- 3) 池谷裕二, 糸井重里, 海馬. 新潮文庫; 2016. 311.
- 4) コミュニケーション－効果的な看護を展開する鍵－. 池田明子訳. 日本看護協会出版会; 1991. 133-134

- 5) 井上永幸, 赤野一郎. WISDOM英和辞典. 三省堂;2003. 411-2062.
- 6) 加藤諦三. やさしさの心理. 大和人生文庫; 1987.
- 7) 田坂広志. 人間を磨く. 光文社新書;2016. 19-20,109,221.
- 8) 中村元. 新・佛教辞典 第三版. 誠信書房; 2006. 252.
- 9) LORETTA SUE BEREMOSK, 他. 松野かほる訳. 新版 看護面接の理論. 医学書院; 1983
- 10) 武野祥二. 患者が望むよい看護. 看護. 1948; 1 (1): 94-103.
- 11) 石頭恵子. 理想の看護師像—心のやさしさを通して看護婦像を考える. 共済医報. 1948; 30 (3): 82-84.
- 12) 遠藤玄昌. 社会貢献から教育へ 足利仏教和合会の百二十七年. 足利仏教和合会史編集委員会;2012. 263.
- 13) 「ICN看護師の倫理綱領」. 国際看護協会; 2012.
- 14) 笠松由佳. 患者が認知する「やさしさ」を成立させる看護の構造化(第2報). 日本看護科学学会学術集会講演. 2009; 29 (1): 373.
- 15) 倉林しのぶ. 「よい」という概念の探求 死別を体験した患者家族にとっての「よい看護師」とは. 日本看護倫理学会誌. 2010;2(1): 23-29.
- 16) 松木志和. 思春期摂食障害患者の行動療法導入までのプロセス ペプロウの理論を用いて分析した一事例. 日本精神科看護学会. 2008; 51(2) : 261-265.
- 17) 佐藤圭子, 河尻雅子, 竹内恵美, 他. 接遇に関する患者のアンケート調査. 尾道市立市民病院医学雑誌. 2008;23(2) : 57-60.
- 18) 大森眞澄. 思春期摂食障害患者に対する行動療法的治療における看護師の役割. 日本精神科看護学会誌. 2006; 49 (2) : 31-35.
- 19) 山口正二, 土屋泰生, 藤本尚文. 生徒と教師の心理的距離の改善に望ましいと判断される行動・態度に関する研究. 1996;29(1): 169-179.
- 20) 吉川久美子, 井部俊子, 久保田純子, 他. 聖路加国際病院における患者満足度調査の傾向と展望. 聖路加健康科学誌. 2001; 9 (1) : 6-18.
- 21) 倉林しのぶ. 「よい」という概念の探求 死別を体験した患者家族にとっての「よい看護師」とは. 日本看護倫理学会誌. 2010; 2(1): 23-29.
- 22) A.H.Maslow. 人間性の心理学. 産業能率大学出版;1987. 55-144.
- 23) 中西睦子. やさしさの力学. 看護. 1989; 41 (3) : 31-38.
- 24) 豊島幸子, 橋本知子, 青山三智子, 他. 看護学生における「やさしさ」の捉えと意識. 群馬医療福祉大学紀要. 2014; 3 (1) : 47-59.
- 25) ステファン・アインホルン. 池上明子訳. 「やさしさ」という技術. 飛鳥新社;2015. 220.

〔 受付日 2019年 7月23日 〕
〔 受理日 2019年12月16日 〕

Study of nurses' perceptions and awareness of “Yasashisa” in nurse – patient professional supportive relationships

Yukiko Toshima¹⁾ Tomoko Hashimoto²⁾ Akemi Matsumoto³⁾

¹⁾ Department of Nursing, Ashikaga University

²⁾ Department of Nursing, Iryo Sosei University, Japan

³⁾ Department of Nursing, International University of Health and Welfare

Abstract

【Purpose】 A questionnaire survey was administered to nurses with the aim of clarifying the relationship between years of work experience and perceptions and awareness of “compassion” (Jp. yasashisa) .

【Methods】 The survey was administered to 150 nurses working in hospitals in G and T Prefectures in Japan based on Hashimoto's conceptual framework,^{1, 2)} which is included in “compassion” in the context of nurses' professional support relationships. Responses were classified on three axes identified in previous research (professionalism, distance, and independence) and then examined in relation to years of work experience.

【Results】 In terms of the relationship between years of work experience and the three axes of distance, independence, and professionalism, among individuals with 0-5 years of work experience, significant relationships were observed between years of experience and the variables of positive distance, passivity, and amateurishness. Among individuals with 11-15 years of work experience, significant relationships were observed for moderate distance, independence, and professionalism. In terms of the features of “compassion” in this context, the development of compassion was apparent for professional content that was independent and easy-to-understand. Further, it also became clear that compassion characterized dealings involving a moderate degree of distance.

【Conclusion】 Perceptions and awareness of “compassion” among nurses indicate an image of a nurse who keeps a moderate degree of distance and practices professional content that is independent and easy-to-understand.

Key words : yasashisa, nurse, patient, awareness, interpersonal relationships